

琵琶湖流域における課題と今後の研究の方向性について

- ▶ 各種対策の推進により、汚濁流入負荷（栄養塩等）は、一定削減されてきたが、琵琶湖流域では新たな課題が生じている。
- ▶ これらの課題は様々な要因が絡み合い、場も横断しているため、これからは、全体的な「つながり」や「循環」の視点が必要。

森林

流域へ影響を及ぼす

森林機能の変化

（渓流水、栄養塩、土砂供給 等）

地球温暖化の進行



放射性物質の
拡散リスクへの備え
（拡散時の影響、リスクコミュニケーション 等）

流域からの汚濁負荷の流入

（農業排水、工業排水、下水処理水 等）

農地



河川

水系のつながりの分断

（瀬切れ・堰堤・水田との落差 等）

市街地



人と水辺・琵琶湖との つながりの乖離

（ライフスタイル、レジャースタイルの変化 等）

湖辺

内湖

水陸移行帯の消失等に見られる

湖辺環境の変化（生息環境の悪化）

（湖岸堤、内湖消失、水位操作、水草繁茂、湖底の泥質化 等）

湖内

在来魚介類の減少等に見られる

湖内生態系の変化

（餌資源不足 [プランクトンの変化]、外来魚増加、栄養塩バランスの変化 等）

琵琶湖～淀川～大阪湾のつながり
（生態系・文化）

研究の視点と総合解析

課題の 複雑化・フィールド横断化

(在来魚の減少など、様々な要因が複雑に絡み、場を横断するような課題が増加)

こうした課題に対応するためには、

- 個別の事象、要因、場に着目するだけでなく、全体的な『つながり』の視点が必要。
- 1機関の対応だけでなく、機関連携による知見の集約・総合化が必要。



① 事象のつながり、循環への着目

- 研究設計の工夫、研究間連携の推進により、事象や要因、場の『つながり』、『循環』に着目したアプローチを行う。

(例) ○ 水系のつながり (山—川—里—湖)

○ エサ関係のつながり
(植物プランクトン—動物プランクトン—魚)

② 機関連携の推進による総合解析

- 各機関の連携により、知見や情報を集結し、総合的・全体的視点からの解析を行う。

